

受験番号

⋮

⋮

⋮

⋮

人 文 科 学

問 題 冊 子

指 示

合図があるまでは絶対に中を開けないこと

1. この試験は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができるかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に40の問題（1—40）があります。配点は80点満点です。
解答カードには表裏あわせて100の解答欄がありますが、41以降は使用しないでください。
3. 解答のための時間は、正味70分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて70分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります。答えの記入のしかたが指示どおりでないと、正解でも無効になります。
5. 答えはすべて、解答カードの定められたわくの中に鉛筆を用いて書いてください。
それ以外のところに書いたり、また答え以外のものを書きこんだりすると無効になります。
6. 一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを定められたとおりに、はっきり書いてください。
7. メモにはこの問題冊子の余白を用い、ほかの紙は使用しないでください。
8. 「解答やめ」の合図があったら、ただちにやめてください。試験監督が問題冊子と解答カードを集め終わるまでは、退室できません。
9. この指示について質問があるときは、試験監督に聞いてください。ただし問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答カードの定められたところに忘れずに書き入れること

[タ イ ト ル]

はじめに

今から 40 年以上も前の 1968 年 4 月 6 日に公開されたアメリカ映画『2001 年宇宙の旅』（スタンリー・キューブリック監督）は、実に不思議でかつ魅力的な映画である。その映像は今も少しも古びていない。そして同時に、そこに提示された問題はそのまま現在の問題であり続けている。文明の起源、ロボットの意思、進化の意味など、様々な問題が全く風化しておらず、今後見る者の心をとらえ続けることだろう。とりわけ、最後の場面は印象深い。そこでは宇宙空間で仲間を失ったものの、かろうじて生き残った主人公の顔が大写しになる。その顔がカットごとに急激に年老いていき、皺を深めて繰り返し現れる。ところが、やがて突然、一人の巨大な胎児が虚空に浮かぶ場面に切り替わる。つまり、瞬時に死と生が交錯し、終わりが始めに戻って行く。この映画の最初の場面が文明の始まりのシーンともとれる描写であったから、この胎児の姿はきわめて強烈な印象を与える。

フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』

20 世紀始めのアメリカを代表するモダニズム作家 F・スコット・フィッツジェラルドの代表作『グレート・ギャツビー』（1925 年）にも同じような構造が見られる。この作品は、極貧の境遇から大富豪へと上り詰めたアメリカンドリームの実現者ギャツビーが、結ばれることのなかったかつての恋人デイジーを取り戻そうとするラブロマンスである。第一次世界大戦を経て、アメリカ合衆国が初めてヨーロッパ列国と肩を並べうる国際的地位を獲得した時期、ことに大戦で戦場となり破壊し尽くされたヨーロッパとは対照的に、無傷のアメリカ合衆国は空前の好景気に湧いた。その 1920 年代の、ニューヨーク市と隣接するロングアイランドが舞台となっている。アメリカ中西部出身の成り上がり者が、東海岸の上流社会で繰り広げる成金趣味のうさんくささや、当時の活況を呈するニューヨーク市の裏表、つまり、豪勢な都市生活と産業廃棄物の作り出す荒れ地とが見事に描かれている。

小説の結末部分で、ギャツビーは自宅のプールで泳いでいるところを背後から暴漢に狙われ、銃撃されて水中に沈む。暴漢もまた、直後、その銃を自分に向けて発砲し自殺してしまう。こうして、小説は悲劇的な結末を迎えるが、語り自体はここで終わらない。その後、音楽でいえばコーダのような、それにしてもかなり長い総括部分が続き、この作品に特別な意味合いを持たせることになる。

この最後の場面でギャツビーは殺害される前のほんの数分、しのびよる暴漢が後ろから狙っ

ているのも気づかず、自宅のプールに浮かせたマットに横たわり周囲を見回していた。その印象的な箇所を原文と二つの日本語訳を併置してみよう。

If that was true, he must have felt that he had lost the old warm world, paid a high price for living too long with a single dream. He must have looked up at an unfamiliar sky through frightening leaves and shivered as he found what a grotesque thing a rose is and how raw the sunlight was upon the scarcely created grass. A new world, material without being real, where poor ghosts, breathing dreams like air, drifted fortuitously about...like that ashen, fantastic figure gliding toward him through the amorphous trees. Chapter 8.

もしそうならば、すでに彼は、住みなれた暖かい世界を失ったような気がしていたにちがいない。高い代価を払いながら、唯一の夢を抱いてあまりに長く生きすぎたと感じていたにちがいない。眼に映る木の葉も無気味なら、葉叢^{はむら}ごしに見上げる空も彼には常の空とは違って映ったのではないか。バラの花もグロテスクな存在なら、芝生は混沌の相をたたえ、そこに射す陽の光はまたいかにもなまなましく、彼はさだめし身ぶるいしたことであろう。現実のものとは思えぬままに実質は備えている新しい世界——そこには哀れな幽鬼どもが、空気の代わりに夢を呼吸しながら、意味も無く動きまわっている——たとえば幻のような木立の中を、彼のほうにむかってすべるように動いてくる、あの人間の形をした灰色の妖怪のように。（野崎孝訳）

もしそうだとしたら、かつての温もりを持った世界が既に失われてしまったことを、彼は悟っていたに違いない。たったひとつの夢を胸に長く生きすぎたおかげで、ずいぶん高い代価を支払わなくてはならなかったと実感していたはずだ。彼は威嚇的な木の葉越しに、見慣れぬ空を見上げたことだろう。そしてバラというものがどれほどグロテスクなものであるかを知り、生え揃ってない芝生にとって太陽の光がどれほど荒々しいものであるかを知って、ひとつ身震いしたことだろう。その新しい世界にあっては、すべての中身は空疎であり、哀れな亡霊たちが空気のかわりに夢を呼吸し、たまさかの身としてあたりをさすらっていた——ちょうどまとまりなく繁った木立を抜けて彼の方に忍び寄る、灰をかぶったような色合いの奇怪な人影のごとく。
(村上春樹訳)

この箇所では、読者にイメージさせようとフィッツジェラルドはひとつの工夫をしている。ギャツビーが死の直前見ていた世界を描くにあたって、彼は『旧約聖書』の「創世記」にある描写を読者に想起させようとしているように見える。原文にある“how raw the sunlight was upon the scarcely created grass. A new world, material without being real, where poor ghosts,

breathing dreams like air, drifted fortuitously about”という箇所、“scarcely created grass”、“A new world”、“breathing dreams like air”などは、「創世記」にある世界創造の第一日目の描写を読者に思い起こさせる。さらに、“fantastic figure gliding toward him”とある gliding は、同じく「創世記」に書かれている悪魔の化身であるヘビの動きを連想させる。このような連想をよびおこす言葉をフィッツジェラルドは散りばめ、人類史の最初を想起させて最後の場面を構成しているのだ。では、こうした作品の構成は何を意味しているのだろうか。この問題を考察するために『グレート・ギャツビー』を高く評価していた詩人 T・S・エリオットの詩作品をとりあげて考えてみよう。

T・S・エリオットの『荒れ地』

T・S・エリオットは 1948 年にノーベル文学賞を受賞した詩人、文芸批評家、詩劇作家である。生まれは合衆国ミズーリー州セント・ルイスだが、1927 年にイギリスに帰化し、「文学では古典主義、政治では王党派、宗教はアングロ・カトリック」と自分の立場を明確に述べた 20 世紀を代表する現代詩人であった。

ノーベル文学賞受賞の対象作品のひとつは、『荒れ地』(“The Waste Land”)という 1922 年出版の詩作品である。「四月はもっとも残酷な月」で始まるこの詩は、様々なヨーロッパ文学やインド哲学からの引用を作品に取り込み、第一次世界大戦後の破壊し尽くされたヨーロッパを、荒地でかすかな生を保つ「生における死」(Death in Life)の状況ととらえ、大胆な形式によって文明の意味を訴えかける詩である。そのあまりにも有名な書き出しは以下の通りである。

April is the cruellest month, breeding
Lilacs out of the dead land, mixing
Memory and desire, stirring
Dull root in the spring rain.

この詩は当時の英詩の世界をヴィクトリア朝文学の嗜好から一挙に変貌させた。ラテン語、ギリシャ語、ドイツ語、フランス語、イタリア語などで書かれたさまざまな古典的作品からの引用がそのまま組み込まれ、あまりにも知的で難解だと多くの激しい批判も巻き起こしたが、そのためにかえって大きな評判を作り出した。引用にあげたように、その始めの 4 行は四月のおとずれとともに荒地に春の雨がふる描写であった。この箇所は、イギリス中世文学の傑作、チョーサーの『カンタベリー物語』の書き出しの部分の思い起こさせる。そこでは春の雨が生命の息吹をもたらし、死の世界から新たな生命の力を呼び起こすものとして描かれている。と

ころがこの詩では、当時の世界大戦のあまりにも激的な破壊と疲弊のため、活力を呼び戻そうとすること自体が辛く、極めて残酷だ、と言うのである。人々は生きながらも、死の世界を生きている。その、五部構成 434 行の作品の最後に置かれているのが、

Shantih shantih shantih (シャンティ シャンティ シャンティ)

と繰り返される呪文のような言葉である。このリフレインは、古代インドの聖典『ウパニシャッド』にある言葉で、サンスクリット語で「平和」、あるいは「平安」を意味する。『ウパニシャッド』では、それぞれの教えの最後にこのように三度繰り返され、教えを受けて動揺した心の平安をもとめる祈願となっている。この詩のコンテキストに置けば、第一次世界大戦で荒野と化したヨーロッパ大陸に平和を求めようとする祈りと捉えることができるだろう。ところが、その文字通りの意味に加え、エリオットは聴覚的想像力 (auditory imagination) ということを手張する詩人でもある。彼は自分の詩論のなかで、この想像力について「音節やリズムをもとめる感情、思想や感情の意識のレベルを遥かに深く突き抜け、それぞれの言葉のちからをよみがえらせる」能力である、と論じている。とすれば、このシャンティ (Shantih) という言葉の音にも、特別の意味を盛り込んでいると考えることも不可能ではない。ちょうどこの詩の始めに出ている春の雨が、最後の場面で、ポツポツと降り出したように聴こえる。この箇所少し前に、遠くから聞こえる雷鳴が描写されていることにも関連している。

T・S・エリオットの『四つの四重奏』

しかし批評家のなかには、この『荒地』よりも、晩年に作られた『四つの四重奏』(“Four Quartets”)という哲学的な瞑想詩を高く評価する人もいる。この詩は 1935 年から 1942 年にかけて書かれた四つの詩を一つにまとめて構成された長詩である。全体のテーマは、大まかに述べれば「時」についての哲学的瞑想であると言ってよい。その第二部の詩の第一行は、

In my beginning is my end.

である。ところがこの詩句は最後に逆転して、

In my end is my beginning.

というかたちで終わる。さらに、第四部の詩の中には、

What we call the beginning is often the end
And to make an end is to make a beginning.

という箇所がある。そして、エリオットはその意味を以下のようにまとめている。

We shall not cease from exploration
And the end of all our exploring
Will be to arrive where we started
And know the place for the first time.

このように、出発点にただ戻って来るのではない。エリオットがイメージとして読者に思い描かせている重要な点は、出発点の意味があらためて初めて認識できる、と言っているところである。つまり戻っては来たが、そこで新たな進展あるいは進歩が始まり、別の上位の段階に踏込んで行くことになる。元の地点にもどりながらあらたに発展しているのだから、いわば螺旋階段を昇るように同じ位置に戻りながら、実はもう一つ上の段階に昇って出発点を見直しているのである。このような展開の仕方をバッハは音楽で造りだしている。

バッハの『ゴールドベルグ変奏曲』とグレン・グールド

バッハの鍵盤楽器用の作品『ゴールドベルグ変奏曲』は1742年に作曲され、彼自身は『アリアと種々の変奏』というタイトルをつけている。バッハが音楽を教えたヨハン・ゴットリープ・ゴールドベルグが、不眠症に悩むカイザーリング伯爵のためにこの曲を演奏して伯爵の不眠を和らげたという逸話から「ゴールドベルグ変奏曲」という名で知られるようになった。全体で30曲からなる変奏曲である。そのテーマである有名なアリアが最初に演奏され、変奏曲が始まる。

変奏曲の最後の第30変奏は、クオド・リベット (quod libet) とよばれるが、その意味はラテン語で「好きなように」である。当時のドイツの風習には、宴会などで何人かが異なった歌を同時に歌う遊びがあった。バッハは当時の流行歌から二曲を組み合わせ、それに主題を絡み合わせて最後の変奏曲を作曲している。ここで使われたのは、「長いこと御無沙汰していました、さあ、こちらへ、こちらへ」と「キャベツとカブがおいらを追い出した。母ちゃんが肉料理にしていれば、出て行かずにすんだのに」である。そしてこの陽気でにぎやかな曲のあとに、最初のアリアが再現されて全曲を締めくくる。

この曲にたいしてそれまでにない絶大な関心を巻き起こしたのは、20世紀を代表するカナダ

のピアニスト、グレン・グールドの、彼独特の解釈による演奏であった。彼は1956年、24歳のとき、この曲をレコード発表することによってピアニストとしてセンセーショナルな注目をあつめ、クラシックレコードの売り上げとして前代未聞の記録を打ち立てた。興味深いのは、彼の演奏家としての一生と、バッハのゴールドベルグ変奏曲とに奇妙な符合が見られることだ。つまり1982年、50歳になった彼は最後に、この曲を再びレコード発表してピアニストとしてのキャリアを閉じた。ちょうどこの変奏曲がアリアで始まり、再びその同じアリアによって終わるように。もっとも、この二つの演奏を比較して見れば、その違いは歴然としている。最晩年に演奏された最後のアリアはテンポとしては極めて緩慢に演奏されている。グールドは、このスタジオ録音のあと時をまたずして死を迎えた。演奏の姿を撮影した残された映像を見ると、最後のアリアの演奏は祈りそのものであるかのようだ。

物語の始めと終わり

世界には始めと終わりがあり、人の一生にも始めと終わりがあり、物語にも始めと終わりがある。ところがある文学作品には、始まりと終わりという感覚を前提としない作品もある。時間の流れのなかのある部分だけを切り取って始まり、プロットの発展、物語の展開、ある結末に向けた積み上げ、そして、ある一つの結論をもたない作品もある。たとえば、京都で平安末期から鎌倉時代を生きた歌人であり随筆家である鴨長明の代表的な作品、『方丈記』の有名な書き出しを考えてみよう。

[A] よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。玉しきの都の中にむねをならべいらかをあらそへる、たかきいやしき人のすみひは、代々を経て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家はまれなり。或は去年焼けてことしは造れり、あるは大家ほろびて小家となる。住む人もこれにおなじ。所もかはらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、わづかにひとりふたりなり。あしたに死し、ゆふべに生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、いつかたより來りて、いつかたへか去る。又知らず、かりのやどり、誰が爲に心を悩まし、何によりてか目をよろこばしむる。

人間と人間をとりまく自然をふくめたすべてが、一時も定まらず常に変貌し衰退していく。あるいは移ろっていく。人の一生は水に浮かぶ泡のようだ、という無常感をあらわしたこの箇所は、時間が流れ行く川のように意識され、すべてが過程のなかにながらその始まりと終

わりについては語らない。永遠の時間の流れのなかの一瞬の水泡として人生をとらえている。この箇所を夏目漱石は以下のように英訳している。

[A]: the spray appears over a cataract, yet vanishes without a moment's delay. Such is the fate of men in the world and of the houses in which they live. Walls standing side by side, tilings vying with one another in loftiness, these are from generations past the abodes of high and low in a mighty town. But none of them has resisted the destructive work of time. Some stand in ruins; others are replaced by new structures. Their possessors too share the same fate with them. Let the place be the same, the people as numerous as before, yet we can [B] meet one out of every ten, with whom we had long ago a chance of coming across. We see our first light in the morning and return to our long home next evening. Our destiny is like bubbles of water. Whence do we come? Whither do we tend? What ails us, what delights us in this unreal world? It is impossible to say. (*Hojio-ki*)

鴨長明がここで述べているのは、いわゆる無常の感覚、つまりすべてが移り行き、衰退していく、という時間経過の感覚とそれに対する諦念の思想である。漱石はこの感覚を明瞭にするため、英訳に工夫をこらしている。ただしこの無常感とは日本独特の感覚ではなく、古代ギリシャの哲学者ヘラクレイトスも同じような感覚をパンタレイ (*panta rei*)、つまりすべては移り行く、という命題で示している。しかも彼も鴨長明と同じように、流れ行く川のイメージを用いて、この思想を展開している。またラテン語の格言に同意のものがあり、「すべては移り行く」(*Omnia mutantur*)、あるいは「時は移り行く」(*Tempora mutantur*)として広く知られている思想でもある。

しかし、キリスト教圏の西欧においては、そのただ移り行く時間のある一点が全く違った意味をもち、そこを基準点として時間が測定されることになった。それこそが、キリストの誕生である。もちろん、キリストが誕生したその時から、キリスト紀元の暦が使われ始めたわけではない。一方、現在世界中でキリストの生誕を祝うクリスマスが行われているが、『新約聖書』のどこにもそれが12月25日であるという記載は見当たらない。『新約聖書』『ルカによる福音書』第2章によれば、野営している羊飼いに天使があらわれ、キリストの誕生を告げたと書かれているが、羊飼いは普通12月に野営はしない。つまりキリストの誕生日も、キリストの生誕年も特定することは出来ていない。しかし、原理的にはイエス・キリストが生まれたとされる年の翌年をキリスト紀元元年として計算しているのである。その方式が取り入れられたのは、6世紀の中頃であり、その時点から遡ってキリスト紀元を決定し、その年を基準にして計算し始めたのである。実際の西暦成立の歴史はもっと複雑な過程をたどったが、ここでは詳細に述べる

余地はない。[C]ラテン語でアノー・ドミニ（“Anno Domini”）、つまり「主の年」として数える西暦が導入され、ヨーロッパ主要国が全世界に所有していた植民地に広がり、やがては全世界で一般化されるようになった。その当時、計算によってもとめられた紀元は、実際には今日推定されているイエスの生年から4年ほどずれこんでいる。『新約聖書』によるいくつかの記述を根拠に、紀元前4年にイエスは誕生したと推定される。

フランク・カーモウドの終わり論

キリスト教圏のヨーロッパの作家たちは、時間構造をどのようなものと受け止めて、それを作品のなかに組み込んできたのだろうか。こうした問題をイギリス文学の文芸批評家フランク・カーモウドが、『終わりの意味』という表題のもとに論じている。その書物から時の始まりと終わりについて、関連する箇所をかなり長い引用してみよう。

人間の時間は、単なる継続であるクロノスと、（中略）別の時間の秩序に属し、祝祭など特別の意味をもつ日、時期、季節など、つまりカイロスとに区別することができる。時計の音をチックチックではなくチックタックとあらわすという事実から、実際に聞こえる時計の音をひとつの虚構で置き換えていると言えると思う。つまりチックという「創世記」と、タックという「黙示録」の間を峻別し、中間に、そうしなければ生じることのない意味を与えたのである。虚構として作り上げられた終わりによって、単なる継続にすぎない時間的経過からなる中間の時は除外された。「時間的統合」というべきものを達成しているのである。つまりひとつの空虚なるものを、意味を担ったひとつのカイロスに変化させている。いうなれば、ここにすべての話しの筋の極小のモデルを見る、とすることができるのだ。さらにこの虚構による変容という観念を拡大して、『新約聖書』を単なる説話と教えの一連の新たな集合ではなく、『旧約聖書』のチックに対応したタックであり、まったく新たな話しの筋をあたえることで、聖書を単なる連続性からはずし、クロノスからカイロスに変化させている、と論ずることも可能となる。キリスト教徒が、ユダヤ教の聖典を取り込んだ時、彼らはそれを全く別な書物に変えたのだということを否定することは出来ない。これは虚構をつくりあげる想像力がなした驚くべき技なのである。

このようにカーモウドは、ギリシャ神話の時を司る神クロノスとカイロスを用いて、時のあり方を区別している。クロノスの時間とは、過去から未来へと定まった速度と方向性をもって機械的に流れる時間のことであり、他方、カイロスの時間とは、定まった速度や方向性をもたず、

主観によってさまざまな動きをする。

カーモウドはさらに続けて、『聖書』が旧約聖書と新約聖書とによって構成されている意味について、次のようにまとめている。原文で引用してみよう。

The book (i.e. the Bible) is now a whole, starting from “in the beginning” and, since Revelation is placed last in the book, ending at the end, so that the whole vast collection has unity, makes one sense, conferred precisely by this transformative fiction. The endless successiveness of the original narratives is abolished; there is a *peripeteia* that turns everything around and gives sense and completeness (*pleroma*, as I called it) to the whole work. (Frank Kermode)

注：Peripeteia とは文芸作品などで作中、突然にもたらされる状況変化、あるいは出来事の急展開を意味する。Pleroma は、神の力の全体性、総体性を意味し、すべての完成、完結を意味する。両語ともギリシャ語をローマ字化したもの。

時間と死の始まりとは

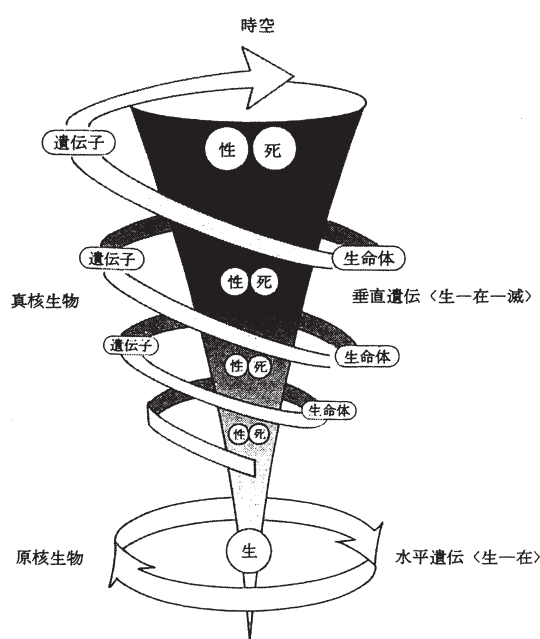
そもそも時間に始めと終わりがあるという概念は、聖書にその発想の起源がある。世界各国にある起源神話はそれぞれの国、あるいは宇宙の始まりを語るが、『旧約聖書』の「創世記」には、「光あれ」という神の言葉で創造が始まったと記されている。[D]、現代物理学は 150 億年前のビッグバンによって宇宙が始まったと考えている。そして宇宙は始まって、生物が発生していない時間が延々と続き、今から 46 億年ほど前に、つまり宇宙が始まって 100 億年ほど時間が経過したところで、地球が出来上がり、そして約 38 億年前に生命が発生したとされている。といっても、それはゲノムを一揃いしか持っていない単純な生命体で、分裂を続けて増殖できるが、その生命体には寿命がない。生物遺伝学を専門とする田沼靖一氏によれば、死が生命体にもたらされたのは 15 億年ほど前で、生命体の進化の結果、ゲノムを二揃いもった生物が生まれた時である、というのである。同時に、死を司る遺伝子も進化の過程で生み出された。すなわち、受精によって始まった細胞分裂の繰り返し回数を制限することで生命体に死がもたらされるのである。言い換えれば、有性生殖による増殖がはじまったとき、死が生物界に入ってきたと田沼靖一氏は考えている。

そして彼は、この生命と死の関係を如実にあらわしている寓話を『新約聖書』に見ている。その箇所を引用してみよう。

「死によって生命は守られている」という逆説は、すでに『新約聖書』の「ヨハネによ

る福音書」一二章二四節～二五節の中にもみられる。(英文原典略)「よくよくあなたがたに言うておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。自分の命を愛するものはそれを失い、この世で自分の命を憎むものは、それを保って永遠の命に至るであろう」。「一粒の麦」は自分の命をきちんと惜しみなく使い果たし、与えられた有限の生を渾身で生きぬくことによって無限の生を得る、というイエスの逆説的な教えである。まさに現在「死の生物学」が解き明かそうとしている生命の摂理そのものを言い表しているように思われる。(中略) 死生は往還の過程なのである。(田沼靖一)

ここで、田沼氏は生死の関係を「往還の過程」と表現している。そして彼自身、この関係を概念図「生命とは何か」で表している。



田沼靖一著『死の起源』22 頁から転載

この図において一番下の円を描いているのが原核生物で、環境の変化による増殖の停止はあるものの、本質的には不老不死である。一方、概念図のその上に螺旋状に展開しているのが真核生物、つまり、そのほとんどが有性生殖を行う生物であり、生命体が垂直に展開していく。そしてその生物個体そのものにそなわった性質として、「確実に死んでいくメカニズムが、遺伝子として組み込まれるようになった」と田沼氏は仮説を述べている。

おわりに

ここまで見て来たように、天文学的な問題として宇宙の年齢などを考えるとき、一体いつを、あるいは何を起点にするべきなのだろうかと考えれば、キリスト紀元が想定している年月を遥かに超えてしまうことになる。単位が億年で考えられるような世界では、キリスト紀元前、紀元後などという尺度を持ち出すことの意味がなくなってくる。人の一生は高々 100 年、人類の文明の歴史が紀元前後あわせても高々 6000 年、ホモサピエンスの発生が 26 万年前である。その短い人類史のうちの、ごくごく限られた人生のなかで、世界が、宇宙が、どのように始まったかを人は想像し、それを科学的に証明しようと試みてきた。つまり、個々の個人は確実に死を迎えながらも、永遠を想像し、その思いを受け継いで生きて来た。それらすべての営みは、人の想像力の成せる技であり、実際には人が生きて目撃することもできない。人は虚構をつくりあげ、それを次代に受け渡し託して来た。そのような想像力としての心の働きを、19 世紀アメリカの女性詩人であるエミリー・ディキンソンは次のような詩にしている。

The Life we have is very great.
The Life that we shall see
Surpasses it, we know, because
It is Infinity.
But when all Space has been beheld
And all Dominion shown
The smallest Human Heart's extent
Reduces it to none. (J1162)

私たちの生は偉大だ
まだ見ない生が
それを超えることは分かっている
それは「無限」だから
しかし広大な宇宙を究め
世界のすべてを知っても
それはこの小さな 人の心の広がりの中に
消えてしまうだろう (野田壽訳)

参考文献

- T. S. Eliot, *Collected Poems*, 1909-1962, Faber and Faber, 1963
F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*, Penguin Modern Classics, 1987(1926)
Frank Kermode, *The Sense of an Ending*, Oxford University Press, 2000
鴨長明『方丈記』角川ソフィア文庫、平成 19 年
田沼靖一著『死の起源 遺伝子からの問いかけ』朝日選書 678、朝日新聞社、2001 年
夏目漱石『漱石全集』第十二巻、岩波書店、昭和 42 年
野崎孝訳『グレート・ギャツビー』新潮文庫、平成 21 年
野田壽編訳『色のない虹対訳エミリー・ディキンソン詩集』、ふみくら書房、1996 年
村上春樹訳『グレート・ギャツビー』中央公論社、2006 年

次の問題（1－40）には、それぞれ a, b, c, d の答えが与えてあります。各問題につき、a, b, c, d のなかから最も適切と思う答えを一つだけ選び、解答カードの相当欄にあたる a, b, c, d のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

例 ☒ (41)

☐ a

☐ b

☒ c

☐ d

1. 『2001 年宇宙の旅』と『グレート・ギャツビー』に共通してみられる「同じような構造」とは、以下のうちどれか。
 - a. とともに 20 世紀の作品である。
 - b. 仲間は死ぬが主人公は生き残る。
 - c. 貧困から裕福へ上昇する。
 - d. 終わりが原点にもどる。
2. フィッツジェラルドの小説のタイトル『グレート・ギャツビー』の「グレート」について、正しくないのは次のどれか。
 - a. 華麗なるという意味である。
 - b. 偉大なるという意味である。
 - c. 成金主義の安っぽさを含意している。
 - d. 壮大なるという意味である。
3. 『グレート・ギャツビー』の最後の場面の原文にある“raw”の訳語について、もっとも正しいのは次のうちどれか。
 - a. 腐っている。
 - b. 古びている。
 - c. 手を加えていない。
 - d. 痛々しい。

4. 『グレート・ギャツビー』の最後の場面の原文の引用に“the amorphous trees”という言葉がある。その翻訳についてもっとも正しい見解は以下のどれか。
- a. 幻のような木立、という意味である。
 - b. まとまりなく繁った木立、という意味である。
 - c. しっかりした形をとっていない木立、という意味である。
 - d. 愛情のこもった木立、という意味である。
5. ギャツビーが殺される直前に見ていたであろうと語られている光景について、次のうち正しいのはどれか。
- a. ギャツビーは死後、導かれるであろう光景を目にしていた。
 - b. ギャツビーの見ていた光景には不吉さが感じられた。
 - c. この箇所の日本語訳では聖書への連想がしにくい。
 - d. この箇所の日本語訳には原作以上に自然描写が詳細である。
6. このエッセーの著者によれば、『グレート・ギャツビー』の最終場面にある“scarcely created grass”の訳としてもっともふさわしいのはどれか。
- a. はえ揃っていない芝生。
 - b. 混沌の相をたたえた芝生。
 - c. 創造されたばかりの芝生。
 - d. 植えられたばかりの芝生。
7. T・S・エリオットの『荒れ地』の冒頭部分についてもっとも正しい見解は次のどれか。
- a. 「四月はもっとも残酷な月」という表現は文学的連想を刺激する。
 - b. 「四月はもっとも残酷な月」という表現は文学的連想として自然である。
 - c. 「四月はもっとも残酷な月」という表現は現実ばなれしている。
 - d. 「四月はもっとも残酷な月」という表現は英語の語法として文法的に正しくない。
8. T・S・エリオットの言う「聴覚的想像力」についてもっとも正しい見解は次のどれか。
- a. シャンティという言葉には水っぽい響きがある。
 - b. シャンティという言葉には雨という意味がある。
 - c. シャンティという言葉には乾いた響きがある。
 - d. シャンティという言葉には平和という響きがある。

9. バッハの『ゴールドベルグ変奏曲』について正しい見解は次のどれか。
- a. グールドは同一である最初と最後のアリアを異なった演奏方法で弾いている。
 - b. 始めのアリアと最後のアリアが同じ曲であるため、永遠の反復が意図されている。
 - c. 不眠症治療のために変奏曲という形式を用いて作曲された。
 - d. アリアとは永遠を求める祈りという意味である。
10. グレン・グールドの「ゴールドベルグ変奏曲」演奏について、もっとも妥当な見解は次のうちどれか。
- a. グールドは意図的に「ゴールドベルグ変奏曲」を生涯の最後の演奏作品として選んでいた。
 - b. グールドはエリオットの『四つの四重奏』とゴールドベルグ変奏曲に特別のつながりを感じていた。
 - c. グールドは自分の生涯と『ゴールドベルグ変奏曲』の演奏に特別のつながりを感じていた。
 - d. グールドのピアニストとしての生涯と『ゴールドベルグ変奏曲』の構成との間には、思いがけない一致がある。
11. 夏目漱石の『方丈記』の英訳について正しいのは次のうちどれか。
- a. 無常感を表現する英語を意図的に避けて翻訳している。
 - b. 理解を助けるために、意図的に原文にない表現を加えている。
 - c. 原文は平安時代の日本語だが意図的に口語風の英語を用いている。
 - d. 西洋の読者の理解を助けるため意図的に聖書的表現を加えている。
12. 漱石の『方丈記』の英訳について、引用した部分に、“We see our first light in the morning and return to our long home next evening. Our destiny is like bubbles of water.” という箇所があるが、それに対応する原文は、「あしたに死し、ゆふべに生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける」である。これについて、以下のうち誤った見解はどれか。
- a. 漱石は、この原文の前半の部分で、朝と夕をあえて逆にして翻訳している。
 - b. 漱石が用いている long home という表現は、墓を意味している。
 - c. 漱石は原文の「ならひ」という言葉に destiny という語をあてている。
 - d. 漱石は原文にある不自然さをそのままに翻訳している。

13. 時についての概念、クロノスとカイロスについて、次のうち正しい見解はどれか。
- a. クロノスとカイロスは同じ時間を書く。
 - b. クロノスは時間上の一点を書く。
 - c. カイロスは時間上の一点を書く。
 - d. クロノスとカイロスは交差しない時間軸の上に存在している。
14. カーモウドが例に挙げた、チックとタックについて、以下の見解のうち正しくないものはどれか。
- a. 時計の音がチック、タックと聞こえると思込んでいるのは錯覚である。
 - b. 時計の音がチック、タックと聞こえると思込んでいるのは虚構である。
 - c. 実際には、時計は、チック、チックと聞こえてもよいはずだ。
 - d. 実際には、時計は、タック、タックと聞こえてもよいはずだ。
15. 聖書のなかで「黙示録」の果たしている役割として正しくないものは次のどれか。
- a. 「黙示録」とは『新約聖書』の最後にある文書で、終末を預言している。
 - b. 「黙示録」によって『旧約聖書』を取り込んで『新約聖書』との統合をもたらした。
 - c. 「黙示録」は単なる始まりがあつて終わりのない物語りを完結させた。
 - d. 「黙示録」は『旧約聖書』と『新約聖書』の関連を峻別した。
16. カーモウドからの引用に「時間的経過からなる中間の時は除外された」とある。これを言い換えると、次のうちどれがもっとも適切か。
- a. 「中間」は排除され、すべてが始まりであるとともに終わりでもあるものとなった。
 - b. 単なる継続ではない特殊な意味が「中間」に付与された。
 - c. 単なる継続を終わりのなき連続性へ転換するために「中間」は捨て去られた。
 - d. カイロスからペリペティア的な性格が取り除かれた。
17. 問題文9頁5行目にある Revelation について、以下の見解のうちふさわしいものはどれか。
- a. 『旧約聖書』の最後にくる預言である。
 - b. 世界の創成について預言をしている文書である。
 - c. 日本語訳では「黙示録」と呼ばれている。
 - d. 『旧約聖書』に続き、『新約聖書』をはじめる導入の役割を果たしている文書である。

18. 問題文 6 頁の引用箇所の冒頭の [A] に挿入されるべき『方丈記』の有名な書き出しは次のうちどれか。
- a. 川を渡れば、水のちりたるこそをかしけれ。
 - b. 行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。
 - c. 命長きは心憂くおもうたまへらるる世の末にもはべるかな。
 - d. 水の、世の常ならず、白き水、速く流れたり。
19. 問題文 7 頁 9 行目の [B] に挿入すべきもっとも適切な言葉は次のうちどれか。
- a. scarcely
 - b. sufficiently
 - c. immediately
 - d. appropriately
20. 漱石が用いた “destructive work of time” という訳語についてもっとも正しいのは次のどれか。
- a. 翻訳者の解釈による挿入である。
 - b. omnia mutantur の訳語である。
 - c. 翻訳者の造語である。
 - d. panta rei の訳語である。
21. 問題文 8 頁 1 行目の [C] に挿入すべきもっとも適切な接続語は次のうちどれか。
- a. とまれ、
 - b. そこで、
 - c. しかし、
 - d. やはり、
22. 現代物理学のいうビッグバンについて、もっともふさわしい見解は次のどれか。
- a. 宇宙の始まりについて、現代物理学は創世記に書かれていることとは異なった理解をしている。
 - b. 現代物理学の見解と、創世記の創造物語とは、ある種の一致があると考えられなくもない。
 - c. ビッグバンとは、現代物理学がつくりあげた虚構にすぎず、物理学者の多くは支持していない。
 - d. ビッグバンの起きる以前にも、それ以後と同質の時間が存在していた。

23. 「死生は往還の過程」という田沼靖一氏の考えを言い換えると、次の見解のうちどれがもっとも適切か。
- a. 地上の生を惜しむことなしには永遠の命は得られない。
 - b. 生死は反復の繰り返しである。
 - c. 「死の生物学」は、生命に実は死が存在しないことを解明しつつある。
 - d. 死とは終わりではなく、新たな生の始まりである。
24. エミリー・ディキンソンから引用された詩の第一行にある“very great”について正しくない見解は次のどれか。
- a. very が great の意をストレートに強めている。
 - b. very によって great の意が軽くなっている。
 - c. 引用された日本語訳には very の意が略されている。
 - d. 単純な言葉遣いに皮肉が込められている。
25. エミリー・ディキンソンの詩の原文について、もっともふさわしい見解は次のうちどれか。
- a. 宇宙や世界が大きくても、人間の想像力はさらに大きい。
 - b. 人間の想像力の大きさは、宇宙や世界の大きさと較べれば、ささいなものだ。
 - c. 人間の想像力の大きさと、宇宙や世界の大きさととは較べられない。
 - d. 宇宙や世界の大きさに較べれば、人間の想像力が想像できる大きさは無である。
26. 問題文の主張に照らしたとき、正しい見解は次のうちどれか。
- a. 『方丈記』と『荒れ地』は、無常観に支えられたおなじ時間感覚を共有している。
 - b. 『方丈記』の構造には、カーモウドのいうカイロスがない。
 - c. 『方丈記』には、鴨長明の想像力によってとらえられた原核生物の不死性が記述されている。
 - d. 『方丈記』に記された時間感覚は、たとえギリシャ語やラテン語に同じような感覚を表わす表現があっても、日本独特のものである。
27. クロノスとカイロスという時間の区別の仕方について、正しくないものは次のどれか。
- a. 歴史年表は時をクロノスとして捉えようとしている。
 - b. 結婚記念日や誕生日は時をカイロスとして捉えようとしている。
 - c. カレンダーは時をカイロスとして捉えようとしている。
 - d. 日記はクロノスとカイロスの混合した営みである。

28. 文脈から考えて、問題文 9 頁 16 行目の [D] に当てはまる語として、もっともふさわしいものはどれか。
- a. くしくも、
 - b. しかも、
 - c. 皮肉にも、
 - d. にもかかわらず、
29. 次の作品のうち、タイトルが聖書と関係を持たないものはどれか。
- a. ジッド『一粒の麦もし死なずば』
 - b. 有島武郎『カインの末裔』
 - c. ミルトン『失樂園』
 - d. カエサル『ガリア戦記』
30. このエッセーの著者は、人間の想像力にたいしてどのような考えを持っていると思われるか。次のうちもっとも適切なものを選び。
- a. 想像力は虚構という現実解釈の場をわれわれに確保している。
 - b. 想像力と科学的証明は互いに無関係である。
 - c. 人間は想像力を駆使して事実をうみだす。
 - d. 人間の想像力は時に関して同一の構造を持っている。
31. あるテキストと他のテキストとの間に引用や参照の関係があるとき、そのような関係をインターテクスチュアリティ（intertextuality 間テキスト性）という。本文の論旨に即したとき、インターテクスチュアリティの関係にないものは次のうちどれか。
- a. 『グレート・ギャツビー』と『聖書』。
 - b. 『荒地』と『カンタベリー物語』。
 - c. 『四つの四重奏』と『アリアと種々の変奏曲』。
 - d. 『ゴルドベルグ変奏曲』と当時の流行歌。
32. 本文中に言及された作品と、その書かれたコンテキストとの関係について、適切でないものは次のどれか。
- a. 『荒地』と第一次世界大戦による荒廃。
 - b. 『グレート・ギャツビー』と 1920 年代のニューヨーク市の裏表。
 - c. 『ゴルドベルグ変奏曲』とカイザーリング伯爵の不眠症。
 - d. 『方丈記』と平安末期の動乱。

33. 『聖書』のもつ時間的構造は以下のうちどれか。
- a. 終わりの後に、始めからくりかえす反復的構造。
 - b. 終わりの後で、始めに戻り、一段上の所からまた始める螺旋的構造。
 - c. 始めと終わりを行ったり来たりする往還的構造。
 - d. 始めと終わりのある直線的構造。
34. 問題文10頁中央にある「生命とは何か」の図解を見ながら、次の見解のうち正しくないものを選べ。
- a. 「往還の過程」とは、むしろ原核生物の生き方を表すのに相応しい表現である。
 - b. 原核生物は螺旋の過程を辿って、永遠に生を保持している。
 - c. 真核生物の生物個体は、ある遺伝子の働きで確実に死を迎える。
 - d. 真核生物は「往還の過程」ではなく、螺旋の過程を描いて生命を保持し続けている。
35. 『グレート・ギャツビー』と『荒地』について述べた以下の文のうち、もっとも正しいものはどれか
- a. どちらも韻文で書かれている。
 - b. いずれも反戦のメッセージを色濃く漂わせた作品である。
 - c. 『グレート・ギャツビー』は『荒地』の成立に影響を与えてはいない。
 - d. 『グレート・ギャツビー』はモダニズム、『荒地』は古典主義の作品である。
36. T・S・エリオットはイギリスに帰化したが、同様の経歴を持つ作家は次のうち誰か。
- a. 小泉八雲
 - b. 魯迅
 - c. ドストエフスキー
 - d. ジェイムズ・ジョイス
37. 『方丈記』と同じジャンルではない作品は、以下のうちどれか。
- a. 清少納言の『枕草子』。
 - b. 本居宣長の『玉勝間』。
 - c. 兼好法師の『徒然草』。
 - d. 夏目漱石の『草枕』。

38. 文学作品とそこで扱われている戦争との関係のうち、正しい組み合わせでないものは次のうちどれか。
- a. トルストイの『戦争と平和』と第一次世界大戦。
 - b. 大岡昇平の『レイテ戦記』と太平洋戦争。
 - c. ホメロスの『イリアス』とトロイ戦争。
 - d. ギュンター・グラスの『ブリキの太鼓』と第二次世界大戦。
39. 時期や時間に関する以下の比喩のうち、性質の異なっているものが一つある。それはどれか。
- a. 日没は生の終わりを表す。
 - b. 夏は青春を表す。
 - c. ゆりかごは誕生を表す。
 - d. 空を渡る鳥は時の経過を表す。
40. この問題文の1頁冒頭の「タイトル」としてもっともふさわしいのは次のうちどれか。
- a. 時をめぐる想像力と芸術
 - b. 命と死の誕生
 - c. 宇宙の歴史と生命の発展
 - d. 文学的想像力と虚構